世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『灰かぶりベッキー』

第 6 話

制作　日本アニメーション
　　　フ　ジ　テ　レ　ビ

脚本　中西隆三

登場人物（第六話　灰かぶりベッキー）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー（レベッカ）
ロッティ
アーメンガード
ラビニア
ガートルード
ジェシー

ピーター

エンマ

ジェームス

マリエット

(デュファルジュ)

女生徒たち

エミリー(人形)　ボナパルト(オウム)

ジャンプ(ポニー)シーザー(猫)

1

ミンチン女学院・院長室

デスクで、女生徒の出す手紙に眼を通しているミンチン――

デスクには、同じような手紙が十数通、未封のまま置かれている。

ノックの音――

ミンチン「（手紙から眼を離さず）お入り」

ドアが開き、アメリアが入って来る。

アメリア「お呼びでしょうか、お姉様……」

ミンチン、身を向ける。

ミンチン「生徒たちが、親許に出す手紙です」

読んでいた最后の一通を封筒に入れると、

ミンチン「全部眼を通しましたが、別に問題はないようです……封をして出しておくように」

アメリア「はい……」

アメリア、封筒の束を受け取ったが、

アメリア「あの……」

ミンチン、見る。

アメリア「セーラさんに頼んでもよろしいでしょうかしら」

ミンチン「なぜ、あの子に……？」

アメリア「馬車がありますし、休み時間に行って貰えば、その方が早いと思いまして」

ミンチン「アメリア……」

アメリア「は……」

ミンチン「あの子にだけ、特別に外出の機会を増やしてあげようとしているのじゃないでしょうね」

アメリア「い、いいえ、そんな……」

ミンチン「（微笑）ま、それでも結構……あの子は大切な生徒ですからね……外出を許します」

アメリア「はい、お姉様……」

ほっとなるアメリア――

2　同・一階廊下

振鈴が鳴る――

3　同・教室の前

教科書を抱えたデュファルジュが出て来る――

続いて出て来るラビニア、ガートルード、ジェシーたち。

そのあとからセーラと、まとわりつくロッティ、アーメンガードが出て来る。

4

同・廊下

来るセーラ、ロッテ、アーメンガード。
封筒の束を手にしたアメリアが駆け寄る。
アメリア「あ、セーラさん、これを出して来て頂きたいの」
封筒を出す。
アメリア「院長先生には、お許しを頂いてありますからね」
セーラ「はい、アメリア先生……」
ロッティがむずかる。
ロッティ「ああン、私もセーラ・ママと一緒に行きたいよォ」
セーラ「ロッティ……」
ロッティを見たが、アメリアに
セーラ「あの、ロッティも連れて行っていいでしょうか」
アメリア「そうねェ……また泣かれると困るし……院長先生には
そう伝えておきますわ」

ロッティ「わアィ」
アメリア「それから、もう一つお願いがあるの」
セーラ「は……」
アメリア、辺りを見廻し、素早くセーラに囁く。
アメリア「今、フランス製の新しい香水入りの化粧石鹸が出ているのよ。一つ買って来て下さらない？」
セーラ「はい、香水入りのフランスの化粧石鹸ですね、判りました」
アメリア「シィッ……」

5	同・馬車置場

ジャンプの世話をしているピーター。
マリエットが来る――
マリエット「ピーター、お嬢様が先生のお使いでお出掛けよ、急

いで馬車を用意して」

ピーター「はい、判りました……」

6 同・表

待っているコートのセーラと、ロッティの前に、ピーターの乗るジャンプの馬車が着く。

セーラ「ありがと、ピーター……さ、ロッティ、乗って」

ロッティ「わあィ、私、セーラ・ママの馬車に乗るのはじめてよ」

ロッティに続いて、セーラが乗ると、ピーター、馬車を出発させる。

×　×　×

入口で、口惜しそうに見送るラビニアとジェシー、アーメンガード。

7 街の通り

八角柱の緑色の郵便ポストが立っている。
ピーターの馬車が来て停り、セーラが降りると、抱えた封筒を次々に投函する。
急いで馬車に戻り、乗り込む。
セーラ「さ、次は石鹼よ」
ピーター「任しといて下さい。石鹼なら飛切り安い店知ってますから」
ピーター、馬車を走り出させる。

8 ミンチン女学院・表

馬車が停り、小さな石鹼の包みを手にしたセーラとロッティが降りる。

セーラ「ありがと、ピーター」

二人、玄関の石段に向かおうとして、ふっと立ち停る。

石段の所に――古ぼけたバスケットを提げ、つぎはぎのコウモリ傘を抱えた粗末な身なりの少女が、玄関を窺ってウロウロしている。

セーラ、ロッティと顔を見合せたが、近づくと声をかける。

セーラ「あの……」

一瞬、振返った少女、ベッキーが、吃驚して飛び退く。

ベッキー「こ、こらァ、失礼申しやして、お嬢様……」

セーラ「なにか……」

ベッキー「はい……実は、ちょっくら物をおだずねしたいと思いやしてェ」

セーラ「ええ、私で判る事ならどうぞ」

ベッキー、手にしたクシャクシャの紙片を出す。

ベッキー「あのォ、このうちサ、おたずねしたいスが……」

セーラ、受取って見る。近づくピーター。

その紙片に、走り書きの文字。

Miss Minchin
Select Seminary for Young Ladies.
West Square 6 Georges Road. London

セーラ「まあ、ミンチン女学院ならここよ」

ベッキー「ひゃあ、ここが私（わす）のたずね場所ですけェ」

ピーター、笑い出す。

ピーター「ほら、あそこの札にちゃんと書いてあるだろ」

セーラもロッティも笑い、ベッキーもつり込まれて

笑う——だが、急にシュンとなる。
ベッキー「だども……私、字、読む事、習ってねえから……」
顔を見合せるセーラとピーター。
セーラ「私……ここの偉い人に逢えって、云われたス」
ベッキー「(微笑)院長先生ね、案内してあげるわ」
セーラ「だ、だども……」
ベッキー「さ、どうぞ……」
ためらうベッキーを促してロッティと玄関口へ——
見送ったピーター、唖然と首をひねる。

9 同・院長室の前

ベッキーを連れて来るセーラとロッティ。
セーラ、院長室のドアをノックする。
ミンチンの声「お入り……」

10 同・院長室

ベッキーを連れたセーラが入る。

セーラ「あの……お客様をお連れしました」

デスクで背を向けて書きものをしていたミンチンが振返る――一瞬、セーラの傍に俯向くベッキーの姿が眼に入り、慄然と椅子から立上る。

ミンチン「な、なんです、その子は……?」

セーラ「院長先生に逢いに見えたそうです」

ベッキィ、顔をあげ、ペコリと頭を下げる。

唖然と見たミンチン、突然、暖炉の傍に行くと呼鈴の紐を引き、ヒステリックに呼ぶ――

ミンチン「アメリア!……アメリア!」

ドアが開き、アメリアが顔をのぞかせる。

アメリア「はい、お姉様……」

ミンチン「メイド頭のエンマを……急いで！」
アメリア「はい、お姉様……」
急いで、引っ込む――セーラ、唖然。

11 同・地下の台所の前

飛び込むアメリア――すぐさまエンマを連れて飛び出して来る。

12 同・廊下

小走りに来るアメリアとエンマ――

13 同・院長室

ドアが開き、アメリアとエンマが入る。

エンマ「お呼びでございますか、院長先生」

窓際で、焦々と外を見ていたミンチンが、振返り、

ベッキーを顎でしゃくる。

ミンチン「手配しておいたメイドです」

エンマ、はじめてベッキーの存在に気がつく。

エンマ「まあ、院長先生のお部屋に入り込んでいましたなんて…」

ミンチン「連れて行きなさい！」

エンマ「申訳ございません…さ、おいで！」

ベッキーの腕を摑んで、ドアを出て行く。

啞然と立尽して見送るセーラ――

14 同・玄関表

ベッキーを引立てて出て来るエンマ。

ベッキーの腕を摑んで、脇の地下への階段へ降りて
行く――

15 同・院長室

キラリとセーラを見るミンチン。

ミンチン「セーラさん……あなたは、この学校の特に選ばれた生
徒さんです……今後二度と見知らぬ人と言葉を交して
はいけませんよ……判りましたね」

セーラ「でも院長先生……あの人、道に迷って困っていたんです
……」

アメリア「セーラさん！」

ミンチン、セーラの手の包みに気づく。

ミンチン「おや……なにを買って来たのです」

はっとなるセーラと、アメリア

ミンチン「お見せなさい」

いきなり取り上げると、包みを破く。

現われるフランス製の石鹸包み。

ミンチン、ジロリとアメリアを見る。

ミンチン「（低く）アメリア……」

アメリア「あの、私、お姉様もお使いになると思って、それでつ

いでにセーラさんに……」

ミンチン「（鋭く）アメリア！」

16 同・地下の台所

ジェームスの前に、ベッキーとエンマ。

傍にマリエットとピーター。

エンマ「コックのジェームスだよ、挨拶おし」

ベッキー「ベッキーす、よろしく」

ジェームス「ふむ……お前、どこから来た」
ベッキー「アッシュフィールド村ッす」
ピーター「聞いた事ないなあ」
ジェームス「ヘッ、アッシュと云や、灰のこった。大方、灰だらけのド田舎だろうぜ……ま、俺は人使いの荒い方だ。その心算でいな」
エンマ「マリエット、そこに去年やめたメイドの服があるから、着せておやり」
マリエット「はい……ベッキー、こっちよ」
ベッキーを案内して出て行く。見送って、
エンマ「私も、これで少しは楽が出来るよ」
ジェームス「あいつがよく働けばな」
二人、どっと笑う。
一方で、憮然と肩をすくめるピーター。

17　同・廊下

——振鈴が鳴る。

教室へ急ぐ女生徒たち——

院長室から出て来るセーラ、じっと考えながら、

教室へ向って行く

（中 C M）

18

同・地下の作業場

ベッキーに、メイド服を着せ終るマリエット——傍のアイロン台に、脱いだベッキーの粗末な服が置かれている。

ベッキー「わァ……私、こんな立派な服着たのはじめてでッすゥ」

マリエット「（微笑）少し大きいみたいだけど、今度私がつめておいてあげるわ」

ベッキー「すンまッせん……」

そこへエンマが入って来る。

エンマ「さあさあ、ぼやぼやしてないで、お嬢様方の教室へ石炭を運ぶんだよ」

ベッキー「は、はい……」

エンマ「石炭は余計にくべるんじゃないよ。院長先生に倹約するようにきつく云われてるんだからね」

ベッキー「は、はい……」
エンマ「それから、暖炉の灰を掃除して、床やガラスを磨いて、
　する仕事は山ほどあるんだからね」
　エンマ、云いすてて出て行く。
マリエット「さ、頑張るのよ、ベッキー」
ベッキー「は、はい……」

19

同・石炭置場

　石炭桶を提げて来るベッキー、スコップで石炭の山
をすくおうとするが、硬くて喰い込まない。
　ピーターが入って来る。
ピーター「俺がやってやるよ」
　ピーター、スコップを取ると、片足をかけ、石炭の
山に踏み込んですくうと、石炭桶に入れる。

ピーター「こうやるのさ」

ベッキー「ありがとう……」

ピーター、更にスコップですくうと桶に入れる。

ピーター「俺、ピーターって云うんだ。なにか判らない事があったら、聞いてくれていいんだぜ」

ベッキー「あのォ、一つ聞きたい事あるんスけど……」

ピーター「あゝ、なんでも聞いてくれよ」

ベッキー「さっき玄関で、私に親切にして下すったきれいなお嬢様、どなた様スか」

ピーター「ああ、俺の恩人、セーラお嬢様さ」

ベッキー「恩人……？」

ピーター「あのお嬢様のお蔭で、俺は、お嬢様専用の馬車の御者になれたって訳だよ」

ベッキー「ンまあ……」

ピーター「優しくて、親切で、きれいで、俺が馬車にお乗せし

て町を行くと、みんなお嬢様を振り返るんだぜ。それが俺の自慢さ」

ベッキー「私……なんのお礼を云ういとまもなくて……」

ピーター「大丈夫だよ、俺から伝えといてやるから……おっと、お嬢様の教室が冷えないうちに、石炭を頼むぜ」

ベッキー「は、はい……」

20 同・地下の階段

重い石炭桶を両手で提げたベッキーが、階段を一段ずつ上って来る。

突然、上りはなに現われるシーザー、ベッキーを見て毛を逆立て、フウッと威嚇する。

仰天してのけぞるベッキー。

ベッキー「うわァ……」

その儘、石炭桶もろとも階段を転げ落ちる。

21 同・階段下

ぶちまけた石炭と桶の中に、尻餅をついているベッキー。

物音に飛んで来たエンマが怒鳴りつける。

エンマ「なにをしてるんだよ、さっさとお拾い！」

ベッキー「は、はい……」

そこへピーターとマリエットが来る。

ピーター「手伝うよ」

出ようとしたピーターをエンマがさえ切る。

エンマ「やめとくれ、余計な手出しは」

ピーター「え……」

エンマ「お前さんは、金持ちお嬢さんの馬車を動かしてりゃいい

んだ。台所の事には口を出さないで貰うよ」

顔を見合せるピーターとマリエット。

しゃがみ込んで、飛び散った石炭を手ですくい、桶に集めているベッキー。

22 同・一階の廊下

再び、拾い集めた石炭の桶を、両手で重そうに提げて来るベッキー。

石炭桶を置いて、休み、息をついて、また持ち上げて、運び出す――

その時　授業終りの振鈴が鳴る。

ビクッと立停るベッキー。

×　　×　　×

行手の教室のドアが開き、教科書と教鞭を抱えたミ

ンチンが出て来る。
続いてラビニア、ガートルード、ジェシー以下の女生徒たち――

× × ×

廊下の中央で立尽すベッキー、行き場を失って、急いで壁側に避け、低く頭を下げる。
無視してその傍を通り、院長室へ消えるミンチン。
続いて来たラビニアたち、ベッキーを蔑みの眼で見たが、声を立てて嘲笑を残すと二階への階段へ駆け去る――
ほっと顔をあげ、見送るベッキー。

23 同・教室

年少組のテーブルで、ロッティ、スーザン、ジェイ

ン、ペネラピ、アーメンガードに囲まれているセーラ。

ロッティ「ね、ね、シンデレラのお話の続きしてェ」

セーラ「そうね、シンデレラのお母さんがなくなって、新しいお母さんが二人の娘を連れて来た所までだったわね」

ロッティ「うん……」

その時、ドアが開いて、石炭桶を提げたベッキーが入って来る。

はっと見るセーラ ――

ベッキー、セーラと眼が合って、微かに頭を下げると、暖炉へ行き、膝まづいて灰かき棒で灰をかきはじめる。

ロッティ「ね、ね、早くしてェ」

セーラ、はっとベッキーから眼を戻す。

セーラ「ええ……（話し出す）新しいお母さんは、シンデレラの

きれいな服をはぎ取り、娘たちに着せてしまいました……そして、シンデレラには、古い仕事着を着せ、木で出来た靴をはかせ、取り上げたベッドの代りに、炉ばたの灰の中に寝かせたのです」

——灰掃除をしながら聞いているベッキー。

セーラの声「だから、シンデレラは、いつも髪の毛から体中まで、灰だらけでした……」

——はっとベッキーの手が停る。

セーラ「シンデレラのシンデと云うのは、ドイツ語で灰の事なのね……だから、シンデレラと云う名前は、灰かぶり娘と云う意味で、新しいお母さんやお姉さんたちがつけた仇名だったの」

じっと聞くベッキー——その顔が拡大しセーラの声がかぶる。

セーラの声「可哀相なシンデレラは、台所で一日中辛い仕事をし

なければなりませんでした……」

24　メルヘン・モンタージュ

――水を運ぶシンデレラ

セーラの声「朝は暗いうちに起きて、水を運び……」

――暖炉に火をつけるシンデレラ。

セーラの声「火をたきつけて、みんなが起きるまでに、料理の支度をしておかなければなりません……それが終ると掃除をして」

――雪の小川で洗濯するシンデレラ。

セーラの声「今度は冷い川の水で、山のような洗濯をするのです」

――火の消えた炉ばたに来て、疲れた身体を横たえるシンデレラ。

セーラの声「そして、夜遅く、やっと仕事を終ったシンデレラは、

また炉ばたの灰の中で疲れ切った身体を休めるしか仕方がなかったのです……」

25

ミンチン女学院・教室

暖炉の前で——うなだれてじっと聞いているベッキー。
ガチャッとドアの開く音。
ベッキー、はっと振返る。
入って来たラビニア、ガートルード、ジェシーが、ジロリとベッキーを見おろす。
ベッキー、慌てて石炭桶を提げると、ラビニアたちに頭を下げ、逃げるように出て行く、
見送ったラビニアたち、セーラたちの傍に来る。

ラビニア　「あの子、あなたのおとぎ話を盗み聞きしてたわ」

セーラ「ええ、知っていたわ……私も、そのつもりでお話していたの」

ラビニア「呆れた……あなたのお母様はどうか知らないけど、私のお母様なら、あんな子に話を聞かせるなんてお許しになる筈がないわ」

セーラ「でも、私のお母様は、そんな事気になさらないと思うわ。お話はみんなに聞いて貰う方がいいと御存知の筈ですもの」

ラビニア「まあ、あなたのお母様は、とうに亡くなってるんでしょ。どうしてそんな事が云えるの」

突然、ロッティが立上る。

ロッティ「セーラのママは、なんでも知ってるのよ……私のママと一緒に天国にいて、いつも私たちの事を見守っていてくれるんだって、セーラが話してくれたわ」

ジェシー達と顔を見合せるラビニア。

ラビニア「セーラ、あなたはとうとうロッティを丸めこんだのね。
でも天国をおとぎ話にするなんて、ミンチン先生が聞
いたらどうお思いになるかしら ね」

セーラ「告げ口なさるなら、どうぞ……でも、私はおとぎ話なん
かじゃなく、天国を信じているのよ。行きましょう、ロ
ッティ、アーメンガード」

セーラ、ロッティ、アーメンガードと出て行く。
肩をすくめて見送るラビニアたち ——

26 地下の台所（夜）

ジェームスが、出来上った大型の両耳スープ鍋をテ
ーブルに置く。

ジェームス「さ、運んだ……熱いからって手離すんじゃねえぞ」

ベッキー「は、はい……」

そっと大鍋の両耳を持とうとする。熱さに思わず手を引く。今度はエプロン前掛を拡げ、両耳を覆って鍋を持ち上げると、そろそろとドアへ運ぶ。

27

同・地下食堂

ミンチンの監視の下に、席についた女生徒たちが、食前の祈りを捧げている。

一方のドアから大鍋を手に入って来るベッキー、鍋の熱さに耐えられず、つんのめるように放り出す。

物音に、一斉に見るミンチン、女生徒達。

ドアからジェームスとエンマが飛び込んで来る。

ジェームス「こいつ、折角作ったスープ、なんてことしやがるんだ」

ベッキー「お、お許し下せえまし……」

エンマ「早く片付けるんだよ、おいで！」
二人、ベッキーを引立てて去る。
茫然と見送るミンチン、女生徒たち。
セーラ、ふと立上る。
セーラ「院長先生……」
ミンチン、見る。
セーラ「私、スープは頂かなくても我慢出来ます。ですから、あの子が叱られないようにしてあげて下さい」
ミンチン、茫然――
ロッティ「（立つ）私も、我慢する……」
アーメンガード「（立つ）私も……」
ためらった女生徒たち、年少組から次々に立つ。
顔を見合せたラビニア、ガートルード、ジェシー、残ったのが具合悪くなり立上る事になる。
ミンチン「（吐息）判りました……」

傍のアメリアも、ほっと頷く――

28 同・地下の洗い場（夜）

泣き顔で、鍋や皿を洗っているベッキー。

エンマが入って来る。

エンマ「さあさあ、もたもたしてないで早く洗っておしまい……

終ったらアイロン掛け、明日の朝は五時に起きて貰うか

らね」

ベッキー「は、はい……」

29 同・セーラの寝室（夜）

置時計が十二時――ベッドに坐ってじっと考えて

いるセーラ。聞えて来るカタンカタンと云う音に、

はっと顔をあげる。

30 同・三階の階段（夜）

疲れ切ったベッキーが、古バスケットとボロ傘を手に一段一段上って来る。

31 同・廊下（夜）

重い足を曳いて行くベッキー。
セーラの部屋のドアが開き、そっとベッキーの後姿を見送るセーラ――
やがてベッキーは、行手のドアを開け、屋根裏への階段へ消えて行く――
じっと見送るセーラ――

セーラのM「可哀相な子……私と、年はいくつも違いはしないのに……」

（第六話　終）